

オープンな場でのプレゼンテーション教育の設計と実践

稲浦 綾* 横山 宏* 森石峰一*

Design and Practice of Presentation Training in Open Situation

Aya INAURA* Hiroshi YOKOYAMA* Minekazu MORIISHI*

要 旨

昨今、大学教育においてプレゼンテーション能力の育成は必須となり、授業のみならず、大学独自のプレゼンテーション大会を開催するなど、多くの大学がプレゼンテーション教育に取り組んでいる。筆者らは大学教育におけるプレゼンテーション教育の新しい形として、2012年より定期的に学生向けのプレゼンテーション・ワークショップを実施してきた。

本稿は筆者らの取り組みのねらいとその実践結果を報告するものである。

1. はじめに

現代社会では、企画の説明や商品の紹介、売り込みなど、プレゼンテーションを行う機会は多い。プレゼンテーション能力は、社会人にとって必須の能力の1つであり、企業向けセミナーや企業内教育でもプレゼンテーション能力の育成が取り入れられている。また、企業は新入社員に即戦力を求めており、近年、大学教育でもプレゼンテーション能力の育成を取り上げるようになり、これまでに多くの授業方法や育成法が提案され、実践されている。これらの大学教育におけるプレゼンテーション能力の育成には、授業におけるプレゼンテーション教育^(1, 2, 3)にとどまらず、学内プレゼンテーション大会の開催⁽⁴⁾、プレゼンテーションコンテストの開催^(5, 6)、プレゼンテーションマニュアルの作成⁽⁸⁾、プレゼンテーション教室の設置⁽⁸⁾、アクティブラーニングでの取り組み⁽⁹⁾など、大学教育において一応の成果を上げつつある。しかしながら、ある側面から見れば、実社会で目標とされるプレゼンテーションの教育に対して、大学でのそれは十分であるとは言えない。

大学におけるプレゼンテーション教育は、あくまでも授業や卒業研究の指導の場が主であり、

* 大阪電気通信大学 Osaka Electro-Communication University

学内で取り組まれているその他のプレゼンテーション教育においても、発表者と発表を見る者（以下、聴衆と記す）は同じ学問を学ぶ者やそれを指導する者であり、聴衆の母集団の視座はある程度限定される。一方、実社会のプレゼンテーションでは、視座の異なる聴衆がいることは確かである。そのため、学生がプレゼンテーションの実施において即戦力となるためには、この「聴衆の視座の違い」を意識したプレゼンテーション教育の場が必要であると筆者らは考えてきた。

そこで、プレゼンテーション能力の向上に意欲のある学生に対し、発表者および聴衆の母集団が限定されていないオープンな場でのプレゼンテーションを体験できる機会を提供することを目的に、学生向けのプレゼンテーション大会を主催することを考えた。なお、ここでいう「オープンな場」とは発表者、聴衆共に視座の異なる者が参加する場と定義している。当然のことながら視点や価値観の違いも重要である。視座とはものごとを見る立場や役割、視点とは着眼点や関心事、価値観とは物の見方で何を重要視するかのこと⁽¹⁰⁾で、これらが異なる人が集まることにより、オープンな場として提供できると考えている。

発表者はプレゼンテーション能力の向上に意欲のある「学生」に限定しているが、本学の学生だけでなく、他大学の学部生、大学院生、科目履修生などの他、大学に限定せず広く参加者を募っている。聴衆に関しても一切の限定を設けず、例えば大学関係者や企業関係者など、まさしく視座・視点・価値観の異なる者が参加する場で、学生にプレゼンテーションをチャレンジさせる機会を与えることにした。

本稿は筆者らが実施したプレゼンテーション・ワークショップの設計とプレゼンテーション部門の実践結果を報告するものである。

2. プレゼンテーション・ワークショップの設計と目的

第1章で述べたが、大学教育におけるプレゼンテーション能力の育成の取り組みは既に始まっている。筆者の一人である稲浦も、本学のみならず、他大学でプレゼンテーション能力の育成をテーマとした授業を展開し、一応の成果を得ている^(2,3)。また、プレゼンテーション能力の育成に関する多くの研究報告がなされている^(1,11,12)。しかしながら、プレゼンテーションには、企画、実施、評価の段階（一般的にはPlan-Do-See）において考えるべき要素は数多くある。表1は筆者の一人である稲浦がプレゼンテーション能力の育成をテーマにしている授業にて、プレゼンテーションの企画の時点で考えておくべき要素として学生に教示している内容を7W2Hを用いて簡潔にまとめたものである。7W2Hとは問題解決の視点の7W1H1Dを企画時の視点として応用したものである⁽¹³⁾。

表1 プレゼンテーションに必要な考え方（7W2Hを用いて）

7W2Hの項目		内 容
When	時刻の項目	日程、時間、制限時間など
Where	場所の項目	会場の広さ、環境など
Who	主体の項目	発表者の立場
Whom	客体の項目	聴衆の立場、年齢など
What for	目的の項目	発表の目的、ねらい
What	内容の項目	発表テーマとその内容
in What	順序の項目	発表の流れ、ストーリー、プロットなど
How	方法の項目	用いる機材、方法など
How much	費用の項目	費用など

表1に示した通り、Whomの項目でプレゼンテーションにおいて聴衆の視座を意識することの重要性を教えている。しかしながら、授業や卒業研究の指導の中では限られた母集団の中でプレゼンテーションを実施することになる。授業では、プレゼンテーションの学びの初級段階として、同じ学生を対象にしたり、共通点のある（特性の似通った）母集団を対象としての練習は容易であるが、次の段階として視座・視点・価値観の異なる聴衆を対象としての練習は聴衆を想定することではできない。7W2Hの他の項目においては、授業の中でのプレゼンテーションの体験により、実体験として学ぶことができるが、Whomにおいては、実体験できる場合とそうでない場合がある。

稲浦の授業では、発表者は聴衆の視座を想定し、発表前にそれを聴衆に伝え、聴衆にはその想定された視座に立ったつもりでプレゼンテーションを見てもらうということも取り入れているが、実際のオープンな場でのプレゼンテーションによって得られることに比べれば十分とは言えない。それは学生による授業レポートからも知ることができる。稲浦の授業では、学生自身が学んだ内容を意識できるように、全15回の授業最終日には「この授業で学んだこと」、内容の区切りごとに「この内容（テーマ）から学んだこと」をレポートとして提出させている。これまでのレポートにおいて、「聴衆」に関して以下のような意見が得られている。

- ・聴衆を意識することの重要さを知った。
- ・聴衆がどのような人たちかによって話し方を変えなければいけないことを学んだ。
- ・対象（聴衆）を考えて準備をしたことがなかった。
- ・聴衆を想定してプレゼンテーションをするのは難しかった。
- ・聴衆を想定して準備をしたが、実際にその場にいるのは同じ学生なので、発表時は聴衆を想定することは難しかった。

など

また、聴衆側の立場に立った際の意見として、「聴衆側が発表者の想定した立場に立って聴くことが難しい」というものもあった。聴衆を意識することの大切さは伝わっているものの、授業において実際に発表を聴くのは同じ学生であるため、イメージを描き切れない、周りの雰囲気から引っ張られるなどの理由から、プレゼンテーションに不慣れな学生にとって、聴衆を想定して発

表することは難しいと考えられる。

しかしながら、学生がオープンな場でのプレゼンテーションを体験することができれば、実際の聴衆の反応を得ることができ、授業で得られない学びを得られるのではないかと考えた。また、筆者らのこれまでの企業人・大学人としての経験知によれば、学生である間にオープンな場でのプレゼンテーションを体験することができれば、基礎的な力の上に、実社会でのプレゼンテーションに対応する力をつけるきっかけとなることは十分に考えられると思っている。よって、学生にとってオープンな場でのプレゼンテーションを体験することは能力の伸長に重要な機会であると考え、そのような場を提供することを企画した。

そして、ただプレゼンテーションの場を与えるだけではなく、その日気づいた事柄にプラスされるような、さらにプレゼンテーション能力を向上させたいと思うようなきっかけ作りとして、学生による発表会の時間に加え、プレゼンテーションに関するミニ・ワークショップや講演会を同時に開催することにした。

筆者らはこれまで社会人基礎力の育成に力を入れてきたことから、この企画の名称を「社会人基礎力を意識した学生によるプレゼンテーション・ワークショップ」とし、学生によるプレゼンテーション大会とワークショップや講演会をセットとして、2012年の6月に第1回目を開催し、その後半年ごとに現在までに6回開催している。第1回から第3回までは「学生によるプレゼンテーション」と「ワークショップ」の2部構成に、第4回から第6回までは「学生によるプレゼンテーション」と「ワークショップ」、プレゼンテーションや社会人基礎力に関する「講演」の3部構成で開催した。

なお、本稿の目的は「オープンな場でのプレゼンテーションの場の提供」が主であるため、第一部の「学生によるプレゼンテーション」を主として報告する。

3. 実践の概要

本章では、2012年より毎年6月と12月の2回実施してきた「社会人基礎力を意識したプレゼンテーション・ワークショップ」の第1部の「学生によるプレゼンテーション ～日頃の学びの内容を一步踏み出して発表してみよう～」(以下、プレゼン部門と記す)について、各回の概要と発表について報告する。3.1にはプレゼンテーション・ワークショップの全体を、3.2にプレゼン部門をまとめる。

3.1 第1回から第6回の概要

これまでに開催してきた合計6回のプレゼンテーション・ワークショップ(以下、プレゼン・ワークショップと記す)の概要を表2にまとめて示してある。プレゼン・ワークショップの目的は、表2にも記載しているが、「学生にオープンな場でプレゼンテーションを経験してもらい、学生のプレゼンテーション能力の伸長をはかること」、「ワークショップや講演からさらに一步を踏み出すきっかけを与えること」の2つである。プレゼンテーション能力の伸長に意欲のある発表者を集めるため、筆者らの担当する授業でワークショップの案内を行い、参加者を募集したり、主催・共催・協賛者からの推薦を募っている。

なお、いずれも開催日は授業に差し支えない日曜日とし、場所は便利で環境の整った本学の寝屋川市駅前キャンパスの101教室で開催している。

表2 プレゼン・ワークショップ第1回～第6回までの概要

項目	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
日程	2012年6月17日	2012年12月19日	2013年6月16日	2013年12月8日	2014年6月15日	2014年12月14日
時間	13:00～17:00	13:00～17:00	13:00～17:30	13:00～17:30	13:00～17:30	13:00～17:40
第1部の時間	13:00～14:30	13:00～14:30	13:00～14:30	13:00～14:30	13:00～14:30	13:00～15:00
発表件数	6件	4件	3件	3件	3件	5件
発表者	・本学学生 5件 ・他大学学生 1件	・本学学生 3件 ・本学と他大学学生の混成グループ 1件	・本学学生 2件 ・本学と他大学学生の混成グループ 1件	・本学学生 2件 ・本学と他大学学生の混成グループ 1件	・本学学生 2件 ・他大学学生の混成グループ 1件	・本学学生 1件 ・本学科目履修生 1件 ・他大学学生 1件 ・他大学学生の混成グループ 1件
参加者 *発表者含む	31名	36名	25名	33名	25名	41名
参加者の所属	大学教員 7名 大学教員OB 2名 大学職員 3名 高等学校教員 0名 社会人 4名 社会人OB 0名 学生(本学) 10名 学生(他大学) 5名	大学教員 9名 大学教員OB 3名 大学職員 1名 高等学校教員 0名 社会人 7名 社会人OB 1名 学生 12名 学生(他大学) 3名	大学教員 4名 大学教員OB 3名 大学職員 0名 高等学校教員 0名 社会人 4名 社会人OB 0名 学生 11名 学生(他大学) 3名	大学教員 7名 大学教員OB 3名 大学職員 1名 高等学校教員 0名 社会人 2名 社会人OB 3名 学生 12名 学生(他大学) 5名	大学教員 3名 大学教員OB 2名 大学職員 0名 高等学校教員 0名 社会人 3名 社会人OB 1名 学生 10名 学生(他大学) 6名	大学教員 5名 大学教員OB 2名 大学職員 0名 高等学校教員 1名 社会人 3名 社会人OB 1名 学生 24名 学生(他大学) 5名
目的	・学生にオーブンな場でのプレゼンテーションを経験してもらい、学生のプレゼンテーション能力の伸長をはかること ・ワークショップや講演からさらに一步を踏み出すきっかけを与えること					
内容	第1部 プレゼン大会 第2部 ワークショップ	第1部 プレゼン大会 第2部 講演&ミニ・ワークショップ	第1部 プレゼン大会 第2部 ワークショップ	第1部 プレゼン大会 第2部 ワークショップ 第3部 話題提供	第1部 プレゼン大会 第2部 ワークショップ 第3部 講演	第1部 プレゼン大会 第2部 ワークショップ 第3部 ミニ講演
主催	大阪電気通信大学 総合情報学部デジタルゲーム学科 准教授 横山宏 情報コミュニケーション学会(第1回のみ)、向塾(第1回～第5回)					
共催	大阪電気通信大学、向塾(第6回のみ ※第1回～第5回までは主催)					
協賛	大阪電気通信大学後援会、情報コミュニケーション学会(第2回以降 ※第1回は共催) 教育システム情報学会関西支部(第3回以降)、やる気研究会、教育理学研究会、上級SE教育研究会 情報教育学研究会(IEC) 高等教育研究部会					

3.2 発表の概要

第1回～第6回の発表の概要について、表1で紹介した7W2Hを用いてまとめたものを表3に示す。なお、How much（費用）の項目は発生しないため省略し、7W1Hで示している。

表3 発表の概要

7W2Hの項目		内 容
When 時刻の項目	発表時間	15分～20分（発表件数による）
	質疑応答の時間	5分
Where 場所の項目	会場	本学駅前キャンパス101教室 （60名収容可能）
Who 主体の項目	発表者の立場	学生 （本学学生、他大学の学生、大学院生、科目履修生等）
Whom 客体の項目	聴衆の立場	学生（本学、他大学、他学部、他学科、大学院など） 大学教員（本学、他大学、他学部、他学科など） 大学職員（広報担当者、入試担当者、就職担当者など） その他の教育関係者（初等・中等教育教職員など） 会社員（塾経営者、一般企業、営業職、採用担当者など）
What for 目的の項目	発表者の目的、 ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究について、まったく知らない人々の視点からのフィードバックをもらいたい ・プレゼンテーションの練習をしたい ・自分の発言力を試してみたい ・社会人の方々の意見を聞いてみたい ・プレゼンテーションに苦手意識を感じているが、自分が成長するチャンスにしたい ・将来、社会に出たときにプレゼンテーションスキルは重要なため、スキルをアップしたい ・自分より一歩前に進んでいる先輩たちと同じ発表の場に立つことで自分に何が足りないのか学びたい <p>※発表者アンケートより抜粋</p>
What 内容の項目	発表テーマ	大学生活や卒業研究、プライベートでの活動など、自由にテーマを設定できる
in What 順序の項目	発表の流れ、 ストーリー	起承転結、結起承転結など、自由に設計展開できる
How 方法の項目	用いる機材、 発表の方法	デスクトッププレゼンテーション その他、準備できるものであれば何を使用してもよい

授業ではプレゼンテーションのテーマを限定することが多いが、本ワークショップでは学生の発表テーマを限定していない。学生が既に行ったことのある活動や経験、卒業研究の内容など、学生本人が発表したいと思うテーマで発表できるようにすることで、学生が自らの意志で参加しやすくなると考えている。また、多種多様なテーマのプレゼンテーションがあることにより、オープンな場であることを発表者自身もさらに意識できるのではないかという狙いもある。第1回から第6回までの発表者の所属と発表タイトル、テーマを表4にまとめて示してある。発表者欄に「*（アスタリスク）」が記されている欄はグループ発表である。

表 4 発表者と発表テーマ

回	順	発表者	発表	発表タイトル	テーマ	紹介者
第1回	1	本学 情報通信工学部 2年	2年 2名 (両名とも北京科技大学からの留学生)	厳しいが満足できた教職課程	教職課程での体験	森石
	2	本学 情報通信工学部 2年		情報科教育法で死ぬほどしたこと	教職課程での体験	森石
	3	* 本学 総合情報学部 2年 2名 (両名とも北京科技大学からの留学生)		日本語の勉強方法	大学生活での体験	稲浦
第2回	4	本学 総合情報学部 4年	4年 3名	ちょっと寄り道、列車旅	大学生活での体験	横山
	5	* 本学 情報通信工学部 4年		Twitterで振り返るAKB総選挙	卒業研究	竹内
	6	滋賀大学 経済学部 1年		社会で活躍できる人になるために	向塾での体験	向塾
第2回	1	本学 総合情報学部 4年	2、3年 各3名	「自分手帳」の開発	卒業研究	横山
	2	本学 工学部 4年		教育実習で感じたこと	教職課程での体験	森石
	3	* 本学 総合情報学部 2、3年 各3名		コミュニケーションをはかるためのゲームの企画	授業内容の発表	稲浦
	4	* 本学大学院 工学研究科 1名 * 関西学院大学 4年 1名		向塾の活動報告	向塾での体験	向塾
第3回	1	* 本学 情報通信工学部 3年1名 * 同志社大学 3年 1名	2年 1名 2、3、4年 各1名	様々な経験を通して変わったこと	向塾での体験	向塾
	2	* 本学大学院 総合情報学専攻 2年 1名 * 本学 総合情報学部 2、3、4年 各1名		OE-Sports	大学での活動	稲浦
	3	* 本学 総合情報学部 4年 2名		やる気研究会での学生の役割	ゼミでの活動	横山
第4回	1	* 同志社女子大学 現代社会学部 2年 1名 * 本学大学院 工学研究科 2年 1名	2、3年 各1名	就活と向塾 アーティキュレーションとしての価値	向塾での体験	向塾
	2	* 本学 総合情報学部 2、3年 各1名		私たちがらみたJIAMSモーションキャプチャスタジオ	大学での活動	稲浦
	3	* 本学 総合情報学部 2、3年 各1名		企業にとつてのJIAMSの魅力	大学での活動	稲浦
	4	本学 情報通信工学部 4年		システム設計の議論アクティビティ教材の設計	卒業研究	竹内
第5回	1	* 同志社大学 スポーツ健康科学部 4年 1名 * 関西学院大学 総合政策学部 1年 1名	1年、4年 各1名	縁を活かす	向塾での活動 これまでの経験	向塾
	2	* 本学 総合情報学部 1年、4年 各1名		OE-Sportsイベント	大学での活動	横山
	3	本学 総合情報学部 4年		ポーカーマリオンロード	卒業研究	横山
第6回	1	* 同志社大学 経済学部 4年 1名 * 京都産業大学 経営学部 3年 1名	4年 2	本当か!? だめよ〜だめだめ大学生	大学での活動 学外での活動	向塾
	2	本学 教職課程 科目履修生 (技術)		科目履修生から見た技術科教育法の授業について	授業内容の発表	森石
	3	大阪大学 外国語学部 4年		近代アートにみるドイツ過去の克服への歩み	卒業研究	稲浦
	4	* 本学 総合情報学部 1年 2		大学に入って経験したこと	大学生活での体験	横山
	5	本学 情報通信工学部 4年		コミュニケーションゲームにおけるカード設計	卒業研究	竹内

表4からもわかるように、発表のテーマは「大学生活での体験」、「学生での活動」、「授業内容の発表」、4年生は「卒業研究」と大学における体験や活動が多く、大学生の普段の生活に密着しているテーマが選ばれている。また「学外での活動」や「向塾（学生向け社会人基礎力養成塾）での活動」も同様に、普段力を入れている身近なテーマが選ばれている。常日頃の経験をテーマに選択できることは、学生が自らの意志でプレゼンテーションにチャレンジする気持ちを後押しできているのではないと思われる。

4. プレゼン部門の内容

全6回のプレゼン部門において、筆者らは発表者にアンケートを実施している。しかしながら、6回通して同じアンケートを実施できていない。第1回、第2回は企画に注力していたため様式を統一できておらず、また第3回は発表者のやる気に注目してアンケートを実施しているため他のデータと形式が異なる。本章ではデータが統一されている第4回～第6回のアンケートについてまとめる。第4回～第6回では発表者アンケートで以下の項目を質問している。

- ・今回の発表をやってみようと思った理由（発表の目的）
- ・この機会に学べると思っていること
- ・具体的に学べたこと
- ・次にこのような機会があればチャレンジしたいか

表3の「発表者の目的」でもいくつか紹介したが、「今回の発表をやってみようと思った理由（発表の目的）」では表5のような結果が得られている。また、「この機会に学べると思っていること」を発表前の期待、「具体的に学べたこと」を発表後の学びと捉え、表6にまとめた。

表5 今回の発表をやってみようと思った理由（発表の目的）

- ・卒業研究について、まったく知らない人々の視点からのフィードバックをもらいたい
- ・プレゼンテーションの練習をしたい
- ・プレゼンテーションを多く経験したい
- ・自分の発言力を試してみたい
- ・社会人の方々の意見を聞いてみたい
- ・プレゼンテーションに苦手意識を感じているが、自分が成長するチャンスにしたい
- ・将来、社会に出たときにプレゼンテーションスキルは重要なため、スキルをアップしたい
- ・就職したときにプレゼンテーションスキルは重要と思うので
- ・プレゼンテーション能力を高めるため
- ・今まで人前で外部の人に向けて発表したことがなかったため
- ・自分より一歩前に進んでいる先輩たちと同じ発表の場に立つことで自分に何が足りないのか学びたい
- ・自分の活動を多くの人に知ってもらいたい
- ・自分の考えを社会人になる前に整理するため

表5の記述には「まったく知らない人の視点」、「社会人の方々の意見」、「外部の人」など、聴衆の視座・視点・価値観を示すキーワードがいくつか出てきており、発表する学生自身もこのプレゼンテーションの機会が「オープンな場」であることを意識していることがうかがえる。また、表6に示している「この機会に学べると思っていること」でも同様に、聴衆の視座・視点・価値観に関する記述が見られ、オープンな場であるからこそ得られる学びがあると期待していることが分かった。

表6 プレゼン部門への学生の期待と学べたこと

回	この機会に学べると思っていること	具体的に学べたこと
第4回	自己成長（プレゼン力、発言力）	発表する自信がついた 伝えることの難しさ
	聴衆の様子を確認した方がよいなどのプレゼンテーション力 質疑応答で想定外の質問があった場合の対応力	自分のプレゼンテーション力の低さ
	質疑応答力 プレゼンテーション能力	着眼点の違い 予想外な場面の対応
	度胸 突然の出来事の対応	ひらきなおり
第5回	今まで学んだことを本番で生かす力	時間配分をもう少し考える必要があった
	緊張下でのプレゼンテーション体験	場数の大切さ
	一歩踏み出す力	経験不足 やったことがないことをやってみる
	前向きな姿勢、緊張感	経験の違い
	緊張する場での経験 トーク力 聞いている人がどのように感じているかをわかるようになるかもしれない	配分の難しさ トークの難しさ 視点をどこにするべきか
第6回	いろいろな人の意見を聞ける 人前で話すのに必要な要素 資料の作り方	話しながら聞き手の表情を見ること 他の発表から話し方、資料の作り方のヒントを得た 異なる内容の発表をたくさん聞いた
	自分の研究に関する新たな視点	興味を引くことの難しさ 自分の研究に関するフィードバック 自分の要約の下手さ
	異なる考え 認識の確認 自分のプレゼンテーション能力の明確化	異なる考え 認識の確認
	人前に立って話すこと パワーポイントでの資料作成	人の前に立って話すことの緊張感 他の人の発表のやり方
	人の発表の仕方を見ることができる	知らない人の前で話す時の緊張感 わかりやすい発表資料はどういうものか 聞きやすい間や抑揚の作り方

第4回～第6回の発表者アンケートでは発表前の期待と発表後の学びを訊ねているが、期待に挙げたものに対して、その結果が得られたかどうかという訊ね方をしていないため、2つの項目が対応していないものが多い。この点は今後のプレゼン部門におけるアンケートの改善点としたい。しかしながら、前述のとおり「学びたいこと」ではオープンな場であるからこそその期待がいくつか挙げられており、「具体的に学べたこと」にも聴衆の視座・視点・価値観による内容がみられた。また、視座の異なる他者の発表を見て学んだことについての意見が多く見られ、筆者らの意図した視座の違いを意識したプレゼンテーション能力の育成の方向性は間違いではなかったと感じられる。

さらには、自分のプレゼンテーション能力の現状、特に反省点について言及するものが多く見られたことは、オープンな場でのプレゼンテーションにより、これまでの教育の中では学生本人も気付かなかったことに気付けたことの表れではないかと思う。

表7には「次にこのような機会があればチャレンジしたいか」の項目の結果をまとめている。

表7 次にこのような機会があればチャレンジしたいかに対する回答

回	回 答	理 由
第4回	は い	私自身の成長のため
	は い	自分の発表力の低さがよく分かったので、次回チャンスがあればチャレンジしたい
	は い	今回は反省点が多いので
	いいえ	発表がづらい
	いいえ	資料等をまとめる時間が十分に取れず、完全な状態でできたいので
	いいえ	他の学生に発表のチャンスを与えたいので
第5回	は い	次の機会があればそれも縁なので
	は い	良い経験だったので
	は い	今回はうまく話せず、グループのメンバーに迷惑をかけたので、次もチャレンジしたい
	は い	知らない世界を見ることができたので
	は い	次は良い発表をしたいと思ったため
第6回	は い	聞き手の人とコミュニケーションが取れるようなプレゼンテーションにしていきたいので
	は い	テーマ設定の大切さ、オーディエンスの層を考慮に入れることの大切さを改めて学べたので
	は い	普段関わることのない人と関係を持てるので
	は い	人の前に立って話す機会はめったにないが、人の前に立って話すことを得意にしたいから
	は い	今回は緊張して話したいことの4割しか話せなかったため、もっと人前で話すことに慣れたいから

表7の回答の示す通り、アンケート提出者16名のうち、13名が再度チャレンジしたいと答えている。理由を見ると、表5と同じく、反省点が多く挙げられており、それを克服したいという意欲が見られる。また、「聞き手」「人前」「オーディエンス」といったキーワードが挙がっており、聴衆への高い意識がうかがえる結果となった。

これらのアンケートの結果より、学生もオープンな場でプレゼンテーションをする機会に対し、聴衆の視座・視点・価値観の異なりから得られるものがあると期待していること、実際の学びとして、自分のプレゼンテーションの現状、反省点、改善点を見つけることができていること、プレゼンテーション能力を身に着けたいという意欲を持っていることを確認することができた。

さらに、表2「プレゼン・ワークショップの概要」に示した「プレゼン・ワークショップの目的」の1つ目（プレゼン部門の目的）である「学生にオープンな場でのプレゼンテーションを経験してもらい、学生のプレゼンテーションの能力の伸長をはかること」が達成できているかを確認するため、第6回のプレゼン・ワークショップを実施した後、グループ発表を実施した2名と個人発表をした1名の発表者に感想をもらっている。これを表8に示す。

表8 発表者のプレゼン・ワークショップ終了後の感想

発表者属性		感 想
グループ発表 (2名グループ)	本 学 総 合 情 報 学 部 1 年 生	いつもの授業なら、決められたテーマ、同じ学科で同じ学年の見慣れた学生の前での発表なので緊張も少ないですが、知らない人前での発表は非常に緊張しました。テーマもどういったものが良いのか、どこまでならおもしろおかしく話しても良いのかがわからなくて、非常に大変でした。異なる大学の先生や学生、企業の方がいらっしゃる事を想像するのはとても難しかったです。聴衆を見ながら発表することは、まだ私には難しく、知っている人や発表前に少しお話しした人の方しか見る事ができませんでした。うなずいてくれる人を見つける事ができた時は、ホッとすることができ落ち着いて発表する事ができたと思います。
	本 学 総 合 情 報 学 部 1 年 生 ※ 第5回に聴衆として参加	一度参加して雰囲気を知っていたので、あの場でどんなことを発表すればいいのかがわからなくて悩みました。また知らない人が相手なのですごく緊張しました。また、何を質問されるのかかわかったです。聴衆を見ながら発表しようにも、知らない人ばかりだったので知っている先生や一緒に発表した人ばかり見てしまいました。もっと人に伝わるように発表したかったです。
個人発表	大 阪 大 学 外 国 語 学 部 4 年 生	発表テーマについて詳しくない方が多くいたため、専門的な用語等の説明が不足していたと感じました。準備段階では気づきませんでしたが、幅広い年代の方がいたことで配慮不足に気付くことができました。 これまで、プレゼンテーションにはある程度の自信を持っていましたが、初めて会う方が多い中で緊張してしまい、上手に話すことができず悔しい思いをしました。初めてこの話を聞く方に対し、内容の要約が下手だったことにも気づくことができました。次にこのような機会があれば、よりよいものを見せられるようにしたいです。

表8に示した通り、3名の発表者はいずれも聴衆の幅広さによる緊張や難しさを体験し、新しい学びを得ていると考えられる。また、グループ発表の2人の感想からは、聴衆に目を配って発表することの難しさ、特にそれが初めて会う人（知らん人）であればさらに難しく感じられることにも触れられており、学びの良い機会となったと思われる。

5. 結論と今後の展開

第4章のアンケート結果と感想より、学生たちはプレゼン部門に参加したことにより、自分のプレゼンテーションについて何らかの課題を見つけられたと考えている。特に、これまでの経験にはなかった様々な視座の聴衆がいたことにより、これまで聴衆を意識してプレゼンテーションをできていなかったこと、フィールドの異なる学生の発表を見たことにより自分のプレゼンテーションに足りない要素に気付けたことは、発表者たちの今後の努力や心構えに依存することはあるものの、発表者たちのプレゼンテーション能力の伸長に大いに役立つであろう。そういった意味において、満足のできる発表ができた学生も、そうでなかった学生にとっても、プレゼン部門への参加には大きな意義があったのではないと思われる。

このアンケートの結果は筆者らにとってもプレゼン部門の開催の意義があったかどうかを確認できるものとなった。授業には関係なく、もちろん成績にも関係のないプレゼン部門に参加する学生がいること、意欲を高く持ちプレゼンテーションを学びたいと思っている学生がいることに加え、アンケートにより社会人の方や交流の機会のない方にプレゼンテーションを見てもらいたいと思っている学生がいることも分かった。また、プレゼンテーションの後も、多くの学生がこういった場があれば再度チャレンジしたいと思っていることも分かり、プレゼン部門およびプレゼン・ワークショップの開催には大きな意義があったと思われる。

本稿はオープンな場でのプレゼンテーション教育の取り組みについて、全6回分をまとめたものである。現時点で全6回実施したプレゼン・ワークショップは、今後、第10回まで継続して開催する予定である。プレゼン部門、および同時に開催しているミニ・ワークショップ、講演会をさらに充実させ、多くの学生にプレゼンテーション能力を伸長する機会を提供していきたい。また、この方法の有用性についても十分に検証する必要があると考えている。

筆者らは、たった1度オープンな場で発表するという経験だけで、学生のプレゼンテーション能力が格段に伸長するとは思っていない。しかしながら、様々な視座の聴衆を前にして発表したという経験は学生の自信となり、今後のステップアップにつながるものと確信している。発表者アンケートから得られた情報をしっかり受け止め、これを基に新たな展開を考えていきたい。

謝辞 1

本ワークショップおよび本研究は、平成23年度科研費補助金（基盤研究（C）「情報社会における表現力を育成する役割別能力育成・リフレクション方式の研究」、課題番号21500917）、および、平成24年度科研費補助金（基盤研究（C）「リフレクティブ・ナビゲーション戦略に基づく授業デザインと授業改善システムの研究」、課題番号23501121）を受けて行ったものである。関係各位に感謝する。

謝辞 2

本稿の執筆にあたり、研究と論文作成に助言をいただいた本学名誉教授石桁正士先生とやる気教育研究所所長岩崎重剛先生に、本ワークショップの発表者を紹介してくださっている本学情報通信工学部准教授の竹内和広先生と向塾理事長の木村文俊氏に、また、本ワークショップの共催者として会場使用に全面的に協力してくださる大阪電気通信大学に深く感謝いたします。

参考文献・参考URL

- (1) 立野貴之、館秀典：「プレゼンテーションに対する意識を高める授業の一考察」、教育システム情報学会、研究報告 vol.29、no.4、pp.11～14、2014年。
- (2) 村上和繁、正木幸子、松永公廣、横山宏：「D-P方式によるプレゼンテーション教育」、情報コミュニケーション学会誌、vol.5、No.1、pp.16-21、2009年。
- (3) 稲浦綾、飯田慈子、正木幸子、横山宏、松永公廣、石桁正士、魚井宏高：「プレゼンテーション能力の育成を目指した授業の実践」、電子情報通信学会技術研究報告. ET、教育工学 107(205)、pp.45-50、2007年。
- (4) 大阪商業大学Webページ：
http://ouc.daishodai.ac.jp/research/at_university/business_idea/final_presen.html
- (5) 早稲田大学Webページ：
http://web.waseda.jp/ches/?page_id=215
- (6) 明治大学Webページ：
<http://www.meiji.ac.jp/ubiq/projects/epresen/index.html>
- (7) 立教大学Webページ：
http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/journal/leaflet_presentation/
- (8) 同志社大学Webページ：
<http://it.doshisha.ac.jp/equipment/multimedia/equipment/presentation.html>
- (9) 産業能率大学Webページ：
<http://www.sanno.ac.jp/exam/learn/active/info.html>
- (10) 石桁正士：「視座・視点・価値観をベースにした認知と認識」、商経学叢、近畿大学商経学会、第58巻、第2号、pp.181～192、2011年。
- (11) 立野貴之：「表現力を高めるプレゼンテーション授業の実践とその考察」、和光大学表現学部紀要、vol.11、pp.111～121、2010年。
- (12) 村上和繁、稲浦綾、宇治典貞、森石峰一、正木幸子、横山宏：「達成感を感じさせるプレゼンテーション教育の場の提案と実践」、情報コミュニケーション学会誌、vol.9、no.1、pp.23-27、2013年。
- (13) 教育心理学研究会著：「すぐに使える問題解決法入門」、日刊工業新聞社、2005年。

